

# 日野谷診療所(那賀町)

## へき地医療 守り続け

### 暮らしを支える

②

「高齢化と人口減が進んだ「医療」「介護」「生  
む山間部の過疎地であった「活支援」の各機能を一体  
でも、地域で最期まで暮らした。当時、県内  
らせる医療・ケア体制が初めて「地域包括ケアシ  
ほしい」。そんな住民の「システム」を導入した施設  
切実な声に応え、旧相生として注目を集めた。  
町が1998年に開設し

たのが「那賀町相生包括  
ケアセンター」(同町大  
久保)だ。  
時代を先取りする医療  
・ケア体制の構築に尽力

入院設備がある日野谷  
診療所を中心、訪問介  
護・看護ステーションや  
保健センターを併設。そ  
れまで地域に分散してい  
んな思いを胸に、25年間

## 介護や予防 包括ケア

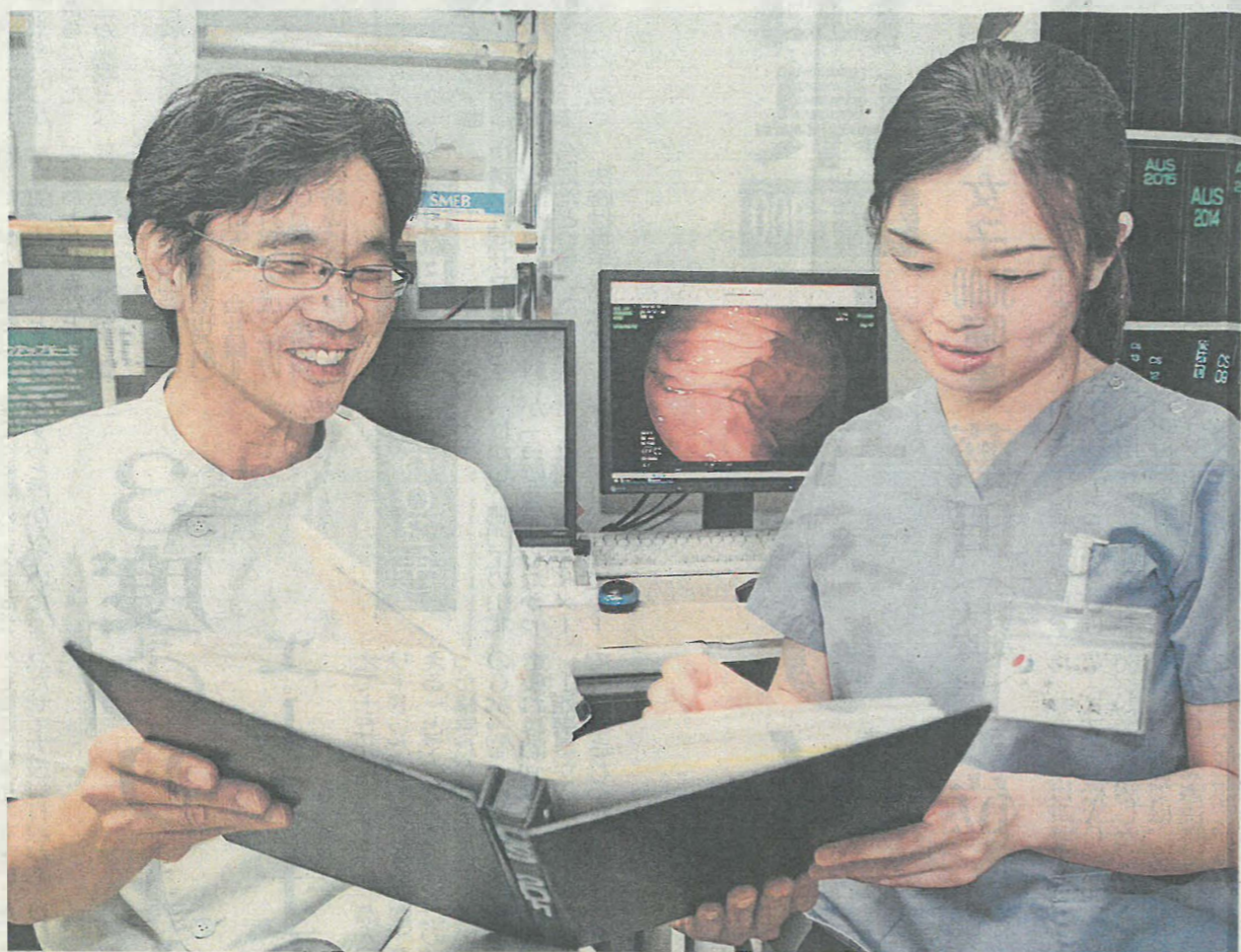
にわたり住民の命と健康  
を守ってきた。と当時を振  
り返る。

美波町出身の濱田医師  
は、自治医大(栃木県下  
野市)を卒業後、県立三  
好病院や半田町立八千代  
診療所などを経て、94年  
に日野谷診療所長に就任  
した。同大の卒業生は9  
年間、出身地の地域医療  
に携わる義務があり、旧  
相生町で2年従事す  
れば、義務年限が終わる  
予定だった。

中学生の頃から外科医  
になるのが目標だった  
という濱田医師。「医者  
は誰もが、それぞれの  
専門分野を極めたいと思  
っている。自分も(義務  
年限を終えたら)外科医  
として再スタートするつ

にわたる。地域の医師不足  
は深刻化した。

「誰かが住民を支えな  
い」と、地域医療は崩壊し  
てしまう。自分がやらな  
ければ」。濱田医師は、  
専科分野を極めたいと思  
っている。自分も(義務  
年限を終えたら)外科医  
として再スタートするつ



県全体の6分の1を占  
める広大な面積の那賀町  
は、山間部に集落が点在  
している。過疎化と人口  
25年間にわたり地域医  
療を支えてきた濱田医  
師と三橋所長、那賀  
町大久保の日野谷診療  
所

規模は大幅に縮小した  
ものの、日野谷診療所が  
地域に果たす役割は全  
く変わらない。高血圧の治  
療で通院している近くの  
小野勝美さん(70)は「何  
でも相談できる先生が  
ついでにくれるので、本  
当に心強い」と信頼を寄  
せている。二回掲載

自治医大は、へき地医療の  
充実・強化を目的に1972  
年開学した。都道府県の負担  
金や付属病院の医療収入など  
で運営している。  
1学年の定員は123人。  
各都道府県から毎年2、3人  
が入学している。学生の入学  
金や授業料は貸与され、修学  
期間(6年)の1・5倍に当  
たる9年間、へき地医療に携  
われれば貸与金の返済は全額免  
除される。  
2017年3月までに41  
24人が卒業し、うち7割が  
病院や診療所の勤務医として  
働く。義務年限の9年が過ぎ  
ても、へき地や離島の医療に

## 「担い手」育てる自治医大

携わる医師が少なくない。  
徳島県出身の卒業生は、1  
期生から2018年3月卒業  
の41期生まで合わせて87人  
いる。このうち7割が県内に  
どまると、医師として活躍し  
ている。  
地域医療では、内科や外  
科、小児科など、あらゆる診  
療に対応できる「プライマリ  
ーケア(初期医療)医」とし  
ての能力が欠かせない。脳卒  
中など生命に関わる救急患者  
を適切に診断し、専門的な設  
備が整った病院につなぐ役割  
も重要だ。患者の在宅療養を  
支えるため、訪問診療に力を  
入れる卒業生も多い。

地域包括ケアシステ  
ム 地域の高齢者らが  
要介護状態になっても住み慣  
れた自宅で暮らし続けられる  
よう、「医療」「介護」「介  
護予防」「生活支援」「住ま  
い」の五つのサービスを一体  
的に提供する仕組み。2006年  
から拠点施設「地域包括支援  
センター」の整備が始まり、  
運営する市町村などが地域の  
実情に応じた体制を築いて  
いる。国は、団塊の世代が全  
75歳以上になる7年後の25年  
までに体制を構築する目標を  
掲げている。